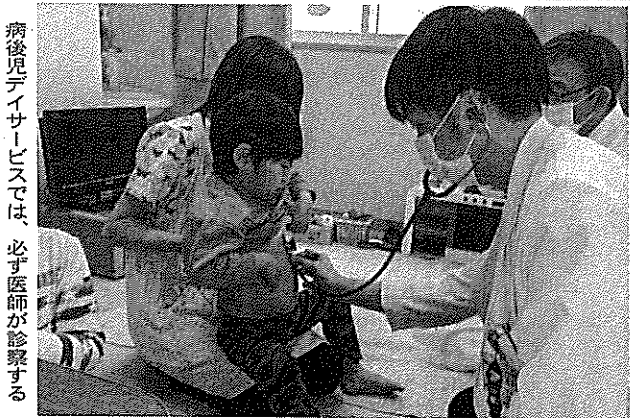


勤医協札幌病院

白石区の勤医協札幌病院 接種などのほか、心身の旧施設で引き続き運営。保健センターや児童相談所、学校などと連携しながら、経済的困窮なごまごまな貧民を抱えたりもした。ちに対する支援や、無料・低額診療も積極的に行っている。また、子どもの気持ちを大切に、小児科看護師が取り組んでいる「プレパレーション」の質の維持や向上に努める。



病後児デイサービスでは、必ず医師が診察する

同病院は、1949年開設の「白石診療所」を前身として約70年、法人理念である「無差別・平等の医療を地域に提供してきた。高齢化に加えて貧困や格差が拡大する中、「費用が心配で子どもを産めない」「お金がなくて病院にかかれない」「妊産婦や子ども、高齢者などのさまざまな健康問題」に向き合っている。

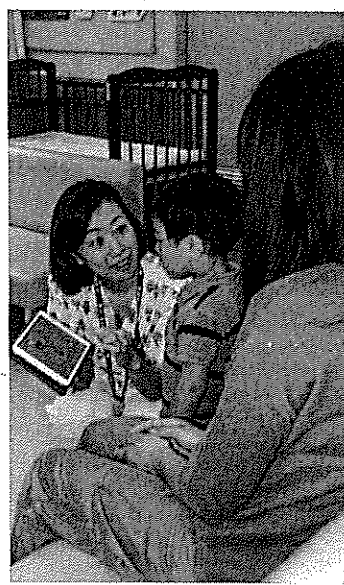
2003年に在宅医療部、翌年に回復期リハビリ科を開設し、さまざまな活動を展開し

小児科門前から院内に プレパレーション向上へ



岡田靖副院長・小児科科長

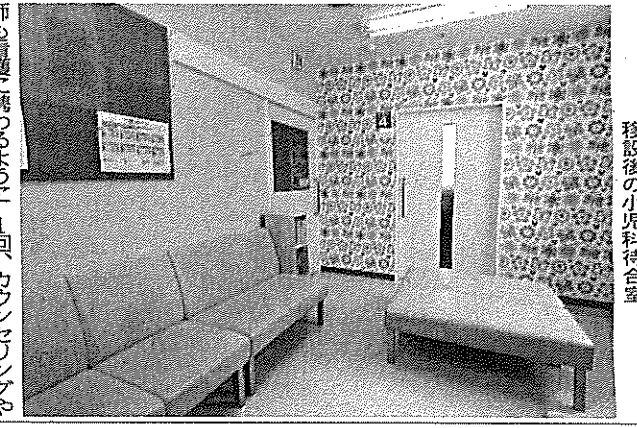
病後児保育は07年にスタート。地下鉄駅に近い立地もあり、17年度は1日平均2・1人が利用し、利用率は市内6カ所の施設でトップとなっている。病後児保育では保護者が中心となり、子どもは親から離れて不安や恐怖を感じ、待っている親の姿が見えないのが子の泣き声がストレスだったという。看護師たちは05年に開いた「子どもの権利条約」の



注射にも慣れさせるために、看護師がタブレットを使い説明をする

注射にも慣れさせるために、看護師がタブレットを使い説明をする。子どもは親から離れて不安や恐怖を感じ、待っている親の姿が見えないのが子の泣き声がストレスだったという。看護師たちは05年に開いた「子どもの権利条約」の

健康センターなど連携して、子どもへの「預かる」プレパレーションを行う。往時の診療所では平均4人の常勤医が在籍していたが、現在は2人。必



移設後の小児科待合室

1回、カウンセリグやプレパレーションなどを通して、小児科診療の質の維持や向上に努める。岡田副院長(小児科)は「機能的に特別に秀でたものがあるわけではなく、外来を中心に、普通の診療を当たり前に

10年以上前の小児科では親を待合室で待たせて、看護師が子供を預かって注射や処置をしたが、子どもは親から離れて不安や恐怖を感じ、待っている親の姿が見えないのが子の泣き声がストレスだったという。看護師たちは05年に開いた「子どもの権利条約」の